幼兒保育の疑義

――小學校より見たる幼兒の保育――

五條義武

一

小學校に於ける初學年の實際教育が最近よほど變りつゝあることは大いに注意すべき事實であらう。「家庭の延長としての初學年教育」若くは「幼稚園と連絡したる幼年兒童の取扱」等は卽ち在來の教育に對する反省を促して、こゝにやうやく低學年に於ける實際教育をある方面に轉換しようとしてゐるのである。

小學校に入學した當初の兒童はその日から明かに小學校の兒童となつたには相違ないが、昨日まではまた明かに家庭の子供であり、幼稚園の幼兒であつた。その間一日にしてすべての事情が全く變化したやうなものゝ、その變化を殊更らしく取立てず、著しい生活の破綻を來さない範圍で、出來るならそのまゝ極めて自然の推移に家庭から學校へ、又幼稚園から小學校へ連絡せしめやうとするは、生活乃至學習指導上初學年の實際問題として當然考慮されねばならぬ重要事項に屬する。

おもふにこの事は一方に於て子供の生活環境からその性情に應ずる唯一の策であるが、尙他方に於ては無理な强制や威壓を去り、格別な命令や注意を與へることなく、自らの途に自らが發動してやがてその學習を展開せしめる無二の根柢で

ある。一定の學校訓練や學習態度を要求し誘導する前に、須らく子供そのものゝ常態をそのまゝ認容して、そこに自己活動を建設せしめねばならぬ。とかういふ意味から家庭若くは幼稚園との連絡に關しては、主として小學校側に於て十分考究し、さうして刷新し改善すべきものなら、宜しくその方策を講ずべきことは言を要しない。

さりながら又小學校の立場から考へるならば、何れ小學校に入學するといふ既定の事實に省みて、幼兒をしてそれに應ぜしめるやう相當考慮を拂つてはしいやうに思はれる。家庭に對してはしばらくおき、幼稚園に就いては一面保育をしてゐる關係上、一層この感が深いのである。

固より幼稚園に於てもこの點には十分顧慮されてゐるやうに思ふ。元來保育には保育本來の目的と使命とがある限り、敢へて小學校入學の準備と視做すことは出來ない。否やがて來るべき學校教育に煩はされぬ獨自の趣旨から、幼兒の成育薫陶に當ることが當然の立場であらうが、併し子供の教養として一線につながる關係上、多少前後を見通すことも必要であり、意義あることである。しかも或時期を劃して小學校に送るべき幼兒としたら、そこに幾分順應するやうな環境をつくることは極めて大切なる措置と思ふ。

それ故に幼稚園に於ける保育本來の精神若くは目的に著しく觸らない範圍に於て、小學校に連絡する途を開き、且有効な基礎を築くために、現在以上にもつと深く考ふべきことがありはしないかと思ふ。たま〳〵余は今年久しぶりにまた尋常一學年を擔任して、色々の經驗を得たが、その中には多少の疑義も懷き、又大いに啓發する所も多かつたが、こゝに氣のつくまゝに二三の問題を提供して識者の批判を仰がうと思ふ。

二

尤も幼稚園の保育に關しては餘り多くの智識をもたない余のことであるから、いふ所全く見當違ひかも知れらい。且余

一個の觀察を通じての卑見であるから、一般からは遠いものかも知らない。それ等を一應つきとめて述べるのが正しいことは思ふけれど、今はさうした暇もないので、たゞ私見のまゝ率直に述べて見たいと思ふ。

まづその一つは幼稚園の保育が實質的に見て多少內容が空虛であり貧弱であるといふ點である。卽ち形式陶冶として修練や筋肉運動や見ること話すことには可なり練習されてゐるに拘らず、實質的に收得してゐる內容は稍これに伴はない傾向があるといふことである。かくいへば幼稚園では好意に何ものをも授けてゐないといふかも知れないが、余はそこに多少の疑問がないではない。といふのは形式的修練が相當に目的を達するのに、どうして實質的陶冶を疎外してゐるのだらうか。殊に實質的陶冶と通じてゞなくては形式修練は到底十分なることは出來ないと思ふからである。

幼兒であつても相當に物に對する好奇心が動き、求知心が湧く、彼等は好んで繪本を見、おもちやをいぢり、動物を捕へ、繪をかく。さういふ間に目や耳の感官の修練され、手指の筋肉が練磨される。と同時に色々のことを知つたり覺えたりして、內容として收得し蓄積するものがある。然るに形式的によく陶冶されてゐながら、實質的に餘りに無內容だといふのはどういふわけであらうか。

家庭から來た子供の中には入學檢定の成績に見ても極めて幼稚なものもあるが、中には幼稚園のの保育を受けたものより遙に實質的に豐富な智識をもつものが尠くない。これは發達の相違に負ふ所もあらうが、一つは知的陶冶が相當に行はれた結果といはねばならない。かういふ子供は親兄弟の餘暇ある度に連れ出され、廣く觀察し見聞して、何ものかを收得するの機會に多く接したためである。さうしてかういふ親達は別に何等の顧慮もなければ遲疑もない。開けば答へる。のみならず問ふ問はぬに關せず色々話して聞かせてゐるので、旺盛な求知心はますゝあほられ、限りなき好奇心はいよゝそゝられる。ために此較的多くの智識を收得して實質的に一歩を來すのであるが、その一面には多少形式的陶冶が疎かにされてゐる。それは親しく自分の感覺機關に訴へて知得するでなくて、多くは口から耳へ說明されたのだから、いきほひ

その點に缺くる所あるは見やすき道理である。

而してまた數觀念や文字力の調査等の結果に徵すると、この間の消息は一層明かである。家庭から來た子供には全くこれ等の教養を經ないものもあるが、その多くは大抵十以下の數觀念などは明瞭であり、片假名なども大體讀めもし且書けるものもある。是等も一方には强制して授けたといふ事情もあらうが、中には自然の間にいつとはなしに覺えたものもないではない。然るに幼稚園の幼兒を見ると、概して是等の點にも劣つてゐるやうである。

もとより計算が出來るとか、假名が讀めないとかいふことは問ふ所でない。しかし子供の自然の域に進むのに敢へて何ものをも授けないとしてすべてを幼兒から遠ざけてしまふことは考へねばならぬことゝ思ふ。故意に教へこむやうなことをしなくとも、ひとりで自然の間に覺える途があるなら、それを塞ぐことは決して策の得たるものではない。どれだけ獨自の力におぼえられるか、どこまで理解し得るかを監視しつゝ、材料として遊戯的に與へる位は保育の作業に加へられても然るべきことゝ思ふ。

かういふ點から幼稚園の保育に於て、幼兒自らが收得する實質的內容を更に豐富に提供する事は出來まいからしと思ふ直觀的材料などは特に重要なものと思ふが、なほ郊外に遊ぶやうな機會がより多くつくられたらと思ふ。さうして自然の生活から直接收得するものが多く得られたら、幼兒の將來に可なり大いなる寄與をすることを疑はない。而してまた一方には繪畫や模型や機械があり、なほ數へる遊具や文字のカードや遊具が備へられて、知らず〳〵のうちにその發達に應じて收得するやうになつたら、眞に幼兒を個人の立場に解放して、その力に印した修練と育成をはかり得ると思ふ。

三

第二にはのび〳〵育てられるが、强いものがないやうに思はれることである。幼弱なものに對してこれを愛護し、環境

整理していぢけないやうに誘導する點からのびゝとすんなりした子供の多いことは一見しても解る。しかしどこか餘り大事にされ過ぎた、お坊ちやん、お嬢さん的臭味が多く。そして内に發する強いものがやゝもすれば影をひそめしゐる。子供はもつと腕白に、女の子でも意氣潑溂として底力があつてほしい。

幼稚園から來た子供は喧嘩をしない。なかゝおとなしい。かういふことも見方によつてはどうかと思ふ。素杆にあるがまゝにのびるものなら、子供の喧嘩口論は常に絶えないのがあたり前である。喧嘩をすればすぐとめる。泣くとだますそれも強ち奬勵するには及ばないが、喧嘩をしても時に知らぬ振りをしてゐることも必要ではなからうか。泣いてもだまるまで待つてゐることも必要ではなからうか。

自分のことは自分でするやうな習慣は家庭から來た者より遙によく出來てゐるやうであるが、その代りこたへる所がない。それ等も内に力を養ふことが缺けてゐるためではなからうかと思はれる。それに色々のことをさせて見ると、案外やらうといふ氣力が乏しい感がある。惡くいつたら氣まゝ勝手とでもいふべきか、とにかく底にこたへる力が足りない。

氣の向くまゝに遊ばせるを本旨とする保育に對して、一事を遂行し專注せしめるやうな要求は敢へて不合理かも知れない。しかしそこは等しく教育である。やりおほせるまでやらせることも人間を作る上には幼兒だといつていつも許してはいけない。何かしようといふ目的活動に立つて幾分意志の陶冶をはかり、徒に次から次と氣を轉ず弊を防ぐこともあつてよくなからうか。是等の點も現在相當に考へてゐるといへば要するに程度の問題であるが、余はどこまでもなさんとする意力を養ひ、最後まで努力する不屈の精神を高潮する點に於て、もつと強く鍛えることを囑望してやまない。子供の心に任せてとはいふものゝ、そろ〳〵やらせることに導いて、仕遂げさせることに堅く強く自らを持する方面に、出來ることなら底力を養ひたいと思ふ。

この事は小學校に進んでから著しい影響を與へるのである。今日では最早初學年の取扱に於て、決して注入教授や強制

的學習を強いはしない。可なり自由な態度に半ば遊ばせるやうな間から、漸次その學習を企圖してゐるのであつて、これだけしなくてはならぬと嚴しくはいはないが、しかし自らやらうとするその態度を根柢として、その力相應に修練の實をはかるのだから、自分にやらうといふ意志もなく、內に發する力が弱かつたら、殆んど何もしないで終るといふやうな結果となる。子供を大事に親切に取扱ふといつても、內に勃發し奔流するこの力がなかつたら、學習は手のつけやうがない隨つてかういふ點により多く啓かれてゐたら、その子供は最も順調な發達を遂げることが出來ようと思ふ。

四

第三にあげることは餘りにませた傾のあることである。おせつかいが多く、こせ〳〵する風もある。卽ち一般には人なれて如才のない長所があるが、どうかするといらぬ差出口をしたり、みだりに先に立ちたがる缺點がある。尤もこれは特に目立つ二三の者に著しいのであるが、尙どこか素實で單純で醇朴なな風が失はれて、やゝ社交的に輕い調子が見える。

このことはむしろ止むを得ない結果で、幼稚園の生活が齎らした共同生活、社會生活の當然の趨勢といはねばならない多くの友達と交り　色々と交涉をする結果は人ずれもするし、ませても來る。そして共同生活の協調から複雜な心的活動を來せば、幾分素朴な風もなくなり、人前をつくらふ社交的訓練も經るのである。しかしかういふ事は明瞭な事實である以上、豫めこれを矯める策に出ることも必要である。

卽ちかういふ人事關係を多少脫却せしめて、餘り交涉を深からしめずに、更に他の方面、自然に印した生活を大いに開くといふことである。人を相手の遊戲から物を相手の遊戲に導き、人事交涉を少くして物は生活を多くするやうにしたら幾分緩和されはしまいか、固より社會生活から受ける多くの利益まで沒却するものではないが、人事關係が複雜になり、人事交涉が多ければ多いだけ、より多くの弊害が伴ふ。その意味に於て自然に卽した生活への轉向は最もよいことゝ思ふ

土ほじりや、草や花をいぢることは一番子供の素朴な原始的生活であつて、家庭の子供、殊に郊外に住む子供が比較的素朴なうちに純まるものを餘り社交的にみだされずに保有するはこのわけからである。

しかし今日の幼稚園の實際は自然に卽けといつても事情が許されないので、どうしても人事交渉が多くなり勝である。隨つてその弊も決して尠くないのであるが、もつと持つて生れた生地のまゝに、卒直に赤裸々にのびることが大切である。單に社交的に調子がよくなめらかに人を遇する位ならよいけれど、うまくやつてのけたり、要領よく立ちまはるやうになつたら、虛僞を助長せしめて、僞善を學ばせることになる。子供はあくまでも純眞に朴實にのばさなくてはならない。さういふ上から餘りに人事交渉に觸れしめて、子供不相應な氣の利くものをこしらへることは特に注意を要することがある。

終りにもう一ついふ事は子供であつても、もつと大きく活動をしなくてはならぬといふことである。身體的にも、へともへになる位うんとあばれることがあつてほしい。小學校へ來ても何となくすることが臆病で規模が小さい。三寸かけるとすぐやめる。少しあついとへこたれる。これは餘り大事をとり過ぎる爲めではなからうか。固より周到な注意をもたなくてはならぬが、いよ〳〵やる時には大膽に豪放にどこまでもやることがもう少しあつてよからうと思ふ。

家庭から來た子供はこの點が割合に大膽で、ありつたけを發揮するやうな傾向がある。先生なども何とも思はなければとめたつてかまはないやうなものもある。そこは稍粗暴ではあるが、器が何となく大きく、物におびへない點はたしかにとり得がある。かういふ子供は少しのことにへこむとか尻こみするとかいふやうなことはない。何でも臆せずにやり出すそれで餘り向ふ見ずに輕卒な振舞をすることはつゝしまねばならぬが、さうかといつてちよこ〳〵小出しにするやうな精神の使ひ方と態度も賞むべきことではないと思ふ。

五

以上自分の觀察から氣のつくまゝを述べて來たが、餘りに非難の口吻が多くなつてしまつた。しかしこれ程强く言ふ趣意は毫もないので、唯蜀を得て隴を望む心から一言それに及んだまでゞある。

若しそれ幼稚園からの幼兒に對する長所を擧げやうといふならば、決して尠くはない。既に述べたことも二三あるが、なほものゝ解りのよいこと、注意のまとまること、卒直でぐず〳〵しないこと、極めて自由で物にとらはれぬこと、比較的情意が圓滿に發達してゐること等はその重なものであつて、是等はまさに保育の賜といはねばならぬが、その一々に就いては玆には略する。

なほ是等の觀察は僅か一學期間の短時日によつたのであるから、將來どう變るかは今より逆睹することは出來ない。或は余の考案の誤れるを發見して自ら訂正するやうになることもあらう。余は今後に俟つて兒童の觀察をますます深くし、何等か教育の參考資料たらしめんと所期してゐるのであるが、また幼稚園の保育に就いても幼兒の實際成績に徵して一層研究したいと思つてゐる。

かぞへねど今宵の月のけしきにて秋の半を空に知るかな

西　行